

真宗宗歌(手話表現)



しん
真



しゅう しゅう
宗 (宗)



か
歌

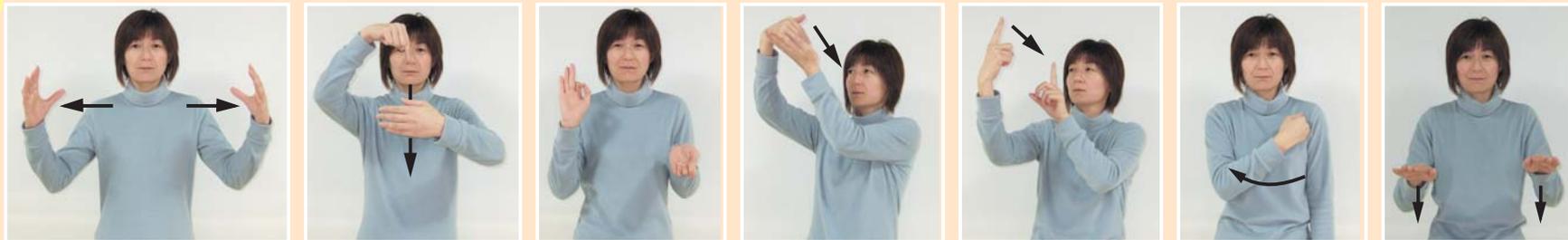
阿弥陀如来が、十方衆生の救いを誓われているにもかかわらず、聴覚に障害をもつ方がたは、お寺にお参りしても聴聞ができず、結果的に仏法に^あ遇うことができませんでした。「御同朋の社会をめざす」宗門では、その反省に立ち、障害をもつ方がたも共に仏法に出遇ってもらおうとの願いから、手話による通訳・伝道を目指し、仏教語の手話化を進めてまいりました。そしてこの度、その第一歩として、法要にお参りの方がたと一緒に「真宗宗歌」が歌えるように、手話表現を考案しました。

この「真宗宗歌」の手話表現が、本山だけにとどまらず、全国のお寺で歌われることを願っています。

『真宗宗歌』はどのようにして生れたの？

大正12年(1923)立教開宗700年にあたり、真宗十派が共同歩調をとるために真宗各派協和会(現在の真宗教団連合)を結成し、毎日新聞を通じて作詞公募した際、大谷派の僧侶、土呂基(三重県亀山市 本宗寺)により作詞されました。宗歌という性格からか、作詞者名は譜に明示されていませんが、新聞社に勤める文学好きな人であり、そのため3番の一部を除いてほぼ原作に近いものとなっています。1933年11月に40歳の若さで往生されています。作曲者の島崎赤太郎(1875~1933)は東京音楽学校教授となり、オルガン教則本などの他に音楽評論の著書を多く残されています。1番は「聞法信仰に入るまで」、2番は「遇い難い仏法に遇って救われた喜び」、3番では「自分の得た喜びを他の人にも伝え広め(大悲伝普化)幸せをとともにすること」を歌っています。人生を問い、精神の依りどころを求めて、ひたすら聞法の歩みを続けるなかで、阿弥陀さまの智慧と慈悲の光に触れて、人生を生き抜く答えをつかみ、阿弥陀さまの大きなお慈悲の中に生かされることの喜びと幸せを歌いあげたいものです。

仏教婦人会総連盟 『めぐみ』(129) 「メロディーの宝石箱」より



《歌詞》	ふかき		のり み法に		あいまつる		
《手話》	大きい	深い	弥陀	教え(説を受ける)	会う	できる	～しました
《説明》	両手を広げる	右人指下へ	弥陀の印	左掌に右4指のせ下へ/右人指上→左人指/右指先を左から右	両手首下向におる		



み 身の		さち 幸	なにに	たとうべき		
心	体	幸福	何	表わす	できる	か?
右人指で腹	1回まわす	あご2回なでる	右人指で左右左/左掌に右人指つけ前へ/右指先を左から右	右掌前へ		



ひたすら	みち 道を	ききひらき		まことの	むね み旨	いただかん	
懸命〔2回〕	教え〔右手1指〕	〔右で〕聞く	〔左で〕聞く	本当	信心	(前方より) 頂く	合掌
両手・顔側面より前へ/左掌に右人指/耳に手をあて頭を少し傾ける	右手口元	左掌胸前・右手握る	両手額まで下げる	合掌する			

【1】ふかき^{のり}み法に あいまつる^み 身の^{さち}幸^あなにに たとうべき ひたすら^{みち}道を ききひらき^{むね} まことの^みみ旨^あ いただかん

私は、深いみ教えに会うことができました。この幸せを他の何にたとえることができるだろうか。

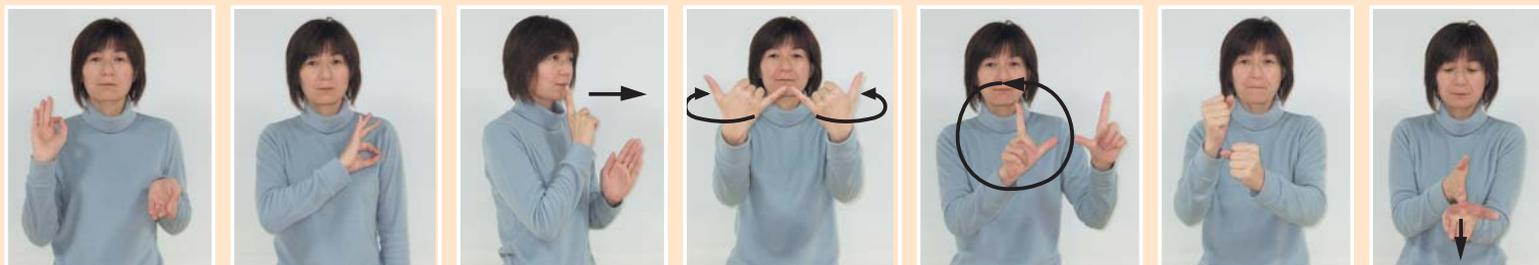
私はひたすらこのお念仏の道(いわれ)を聞きひらき、まことの信心をいただきます。【聞法信仰に入るまで】



とわの	闇 ^{やみ}	より	すくわれし	照らす	すくう	安心
過去～未来	暗い	内側	弥陀	照らす[やや右より]	すくう	安心
右掌後へ 前へ	両手を中央で重ねる	左手内側に右人指入れる	弥陀の印	右手を開きながら下げる	両手ですくう	掌上向で下ろす



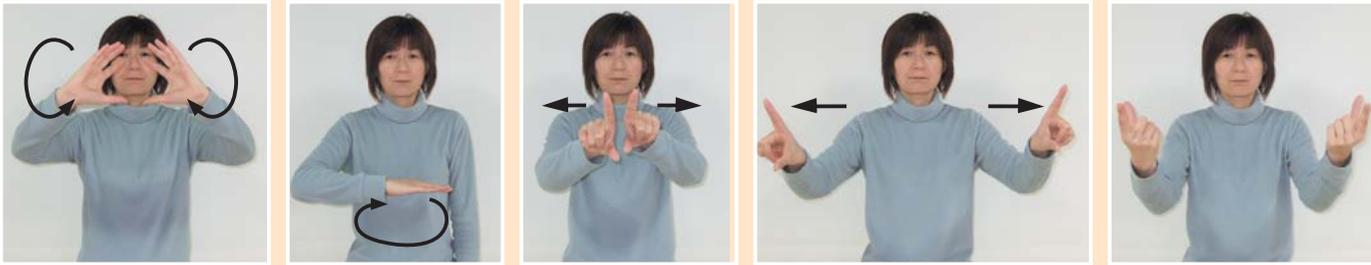
心	体	幸福	なにに	くらぶべき	できる	か?
右人指で腹	1回まわす	2回なでる	何	比べる	できる	か?
右人指で腹	1回まわす	2回なでる	右人指で左右左/2回交互に上げ下げ/右指先を左から右	比べる	できる	右掌前へ



六字の	み名を	となえつつ	よ世の	生業に	いそしまん	
弥陀	名前	念仏・言う・言う	社会	生活[1回]	仕事[数回]	専門
弥陀の印	親指人指で名札/口元より右人指前へ/水平に円を描く/人指・親指伸ばし右回し/右拳で左拳打つ/左掌上に右手のせ前に出す					

『真宗宗歌』は大正12年(1923)に浄土真宗十派で制定され、現在でも真宗各派の本山から全国のお寺に至るまで、大切に歌われている浄土真宗の宗歌です。

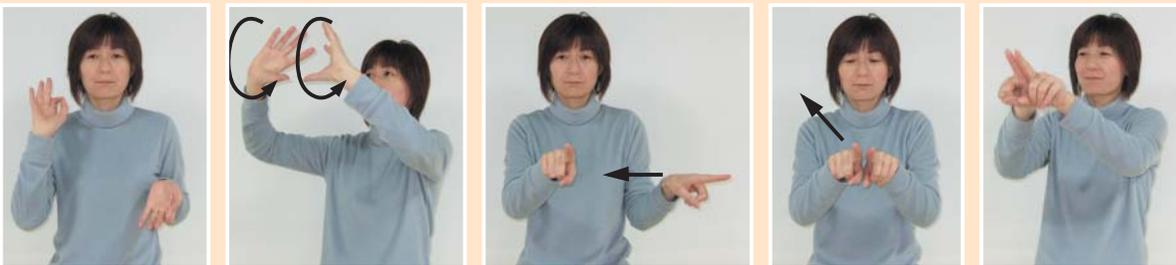
【2】とわの闇^{やみ}より すくわれし 身^みの幸^{さち}なにに くらぶべき 六字^{ろくじ}のみ名^なを となえつつ よ世^よの生業^{なりわい}に いそしまん
 過去から未来へと続く、迷いの暗闇から、私は救われました。この幸せを他の何に比べることができるだろうか。
 私は南無阿弥陀仏のお念仏を称えながら、社会生活や仕事にはげみます。【仏法に遇って救われた喜び】



うみ 海の	うちと 内外の	へだてなく	
世界	みんな	平等	同じ
両手丸め球を描く	水平に右に回す	親指人指ひろげ左右に開く	親指・人指2回つまむ



おや 弥陀の	とく 徳の	とうとさを	わが	はらからに	つたえつつ
彌陀	愛	尊い	私の	仲間	ひろめる
彌陀の印	左手甲上で右手回す	左掌に右拳親指上	右人指で胸	両手握り水平に右に回す	口元より手を前にひろげる



みくに たび 浄土の旅を	ともにせん	
彌陀	国	一緒に
彌陀の印	やや右上で両手丸め球を	右人指に左人指を
		右上に行く



●『真宗宗歌』の手話表現はいかがでしょう。歌の心やみ仏の願いがご理解いただけましたでしょうか。伝道社会部では、皆さまのご意見 ご感想をお待ちしています。

●本山では次の法要に手話通訳が行われています。皆さまお誘いあわせ、お参りください。

4月15日春の法要 / 5月21日宗祖降誕会法要

要



問い合わせ

浄土真宗本願寺派 伝道社会部
 〒600-8358 京都市下京区堀川通花屋町下ル
 本願寺ホームページ <http://www.hongwanji.or.jp/>
 TEL 075-371-5181(代) FAX 075-371-5217

【3】海^{うみ}の内外^{うちと}の へだてなく み仏^{おや}の徳^{とく}の とうとさを わがはらからに つたえつつ 浄土^{みくに}の旅^{たび}を ともにせん

大海の内外、国の内外の隔てなく、阿弥陀さまのお徳のすばらしさを、私の身近な人からみんなに伝えながらお浄土への旅をともにしよう。【喜びを人々に伝え広めていこう】